

『プラタナスの木』 教材解釈

三重サークル 河合

登場人物 マーチン 花島君 クニスケ アラマちゃん おじいさん

中心人物 マーチン

場面 一～五

あらすじ

一

マーチンが仲間と一緒に大きなプラタナスの木が一本だけ生えている公園で最近熱中しているサッカーで遊ぶ話。

二

マーチンたちが公園のベンチでサッカーをながめていたおじいさんとだんだん親しくなり、おじいさんから地上のみきや枝葉がなくなったら、水分や養分を送れなくて根が困ってしまうという話を聞いた話。

三

マーチンが夏休みに入り祖父母の家に帰省し、今年いちばんの強い台風が通り過ぎた後、「森の一本一本の木の下には、それと同じぐらい大きな根が広がっている」というおじいさんの言葉を思い出した話。

四

マーチンがプラタナスの木が切り株だけを残して消えてしまったことを知り、残った根がきっと困っていると思った話。

五

マーチンが地下に広がっている根のことを想像していたら、プラタナスの木の上に立ってみたくなり、春になればまたおじいさんに会えると思った話。

大問題

なぜマーチンは、始めは半信半疑だったのに、切りかぶを見て残った根っこはきっとこまっているんだろうねと言ったのか。

大問題を解決するために問題を作って考えたいところと解釈

二

○ふうんはどんな意味か。

ふうん・・・①同輩以下に対する軽い返事や、無視・半信半疑などの気持を表わす。ふむ。

②感心する反面、怪しむ気持を禁じ得ないことを表わす。ふうん。

マーチンはおじいさんの話については、半信半疑であった。根が困るという木を擬人化したような考えについて懐疑的であったと予想する。

三

○なぜおじいさんの顔を思い浮かべたのか。

思い浮かべる・・・心の中に描く

マーチンが自らの意思でおじいさんのことを心の中に描いたことになる。その目的は？

○なぜマーチンは、おじいさんの言葉を思いだしたのか。

おじいさんの言葉

「森の一本一本の木の下には、それと同じぐらい大きな根が広がっている。」

思い出す・・・忘れていた事を何かの機会に思い浮かべる。

マーチンが思い出したきっかけは何か。

→あんなにゆれていた森は、今は静かに太陽の光を受けてぴかぴかかがやいている。

小川はまだ濁流のままだったけれど、鳥やせみはうれしそうに鳴き始めている。

このことがきっかけと考える。マーチンは木がたおれたり、森がくずれている予想をしていたはずである。しかし、実際は大きな変化がない森がそこにはあった。このことで半信半疑であったおじいさんの話を完全に信じたのである。

○マーチンに木の下根がはっきりと見えるようなきがしたのはなぜか。

台風後の森の様子から、おじいさんの話を信じたから。

今年いちばんの台風を体験し、一本一本の木とその根が森全体や自分の祖父母の家も守ってきたことを実感したマーチン。マーチンの木に対する考えや思いも変わった場面である。ただの遊び場であった祖父母の家の周りの木は、森や家をずっと昔から守ってきてくれた存在と改めて捉えなおしたのである。

四

○近所の人に聞くとどんな様子か。

人がめったに来ない公園なので、わざわざ近くの家を訪れプラタナスの木がなくなっている理由を聞きにいったと思われる。それぐらいマーチンたちにとっては大事件なのである。

○なくなっていたではなくて消えてしまっていたとはどういうことか。

消える・・・現象・事物・状態などの存在が感じられなくなる。

マーチンたちにとって、プラタナスの木はただの木ではなく、存在感のあるものであるということである。おじいさんとの関わりについても想像できる。

○ベンチがぽつんとぽつんとってどういうことか。

ぽつんと・・・他から離れて孤立していることを表す。